平成２８年度　学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】 中高一貫教育の特長を生かし、高い進路目標に向かって邁進する生徒を育て、その実現を図る。

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の扱い
①校外模試等の結果を教科会や学年会で分析し、生徒にフィードバックするとともに、１ランク上の志望を持たせることにより学習意欲と学力の向上を図る。	１，２年生校外模試の３教科偏差値６０以上の生徒が（母数は在籍数） Ａ　30%以上 Ｂ　25%以上 Ｃ　20%以上 Ｄ　20%未満である ３年10月記述模試で５教科文/理偏差値が文系で56、理系で54以上の現役生徒が Ａ　35%(110人)以上である Ｂ　29%(90人)以上である Ｃ　23%(70人)以上である Ｄ　23%(70人)未満である	１年生７月進研模試　【判定：Ｄ】 ３教科ＳＳ６０以上　６４名（１７．９%） （昨年同期　５９名　１８．３%） ２年生７月進研模試　【判定：Ａ】 ３教科ＳＳ６０以上　１０４名（３３．７%） （昨年同期　５６名　１７．７%） ３年生７月進研模試　【現時点での仮判定：Ｂ】 ５教科文系ＳＳ５６以上　４２名 ５教科理系ＳＳ５４以上　５５名 合計　９７名（３２．０%） （昨年同期　８８名　２８．７%）	今年度の１年生は１クラス増の９クラスである。英語のSS７0以上の人数は多いが、その他の教科は上位者が少なく、さらに全体としてSS４０～５０の層が増えている。クラス増の影響かと思われるが、今後は特に下位層への手当てなどに配慮しながら、高い志を抱かせる進路指導を考えていきたい。 ２年生は３教科の平均点偏差値が過去５年間で最も高い数値で、SS６０以上の数も多く、１００を超えている。近年弱さがみられた数学も好成績である。好調の理由を分析しつつ、弱点をしっかりと補強し、「受験生」となる２年生２学期に向かわせたい。 ３年生は、文系の偏差値７０以上の人数が多く、懸念されていた数学・理科も一昨年とほぼ同数まで回復し、順調な動きを見せている。授業はもちろんのこと、後期補習や添削指導など、効果的な学習指導を行っていきたい。
	１，２年生で難関大を志望する生徒が Ａ　50名以上である Ｂ　40名以上である Ｃ　30名以上である Ｄ　30名未満である	４月進路志望調査 難関大志望者　１年生　６６名　【判定：Ａ】 ２年生　３９名　【判定：Ｃ】	１年生の難関大志望者数は多いが、２年生は３９名にとどまった。学習の原動力となるような適切な情報を提供し、１年生に関しては志望をさらに確固たるものにさせ、２年生に関しては１つ上を向かせる指導を目指したい。難関大志望者が周囲によい影響を与え学年全体が伸びていくように、働きかけを継続していきたい。
②難関大学を中心とした高い進路志望の実現のため、入試分析や補講・添削等のサポート体制を強化する。	超難関大・国公立医学科の現役合格者数が Ａ　３名以上である Ｂ　２名である Ｃ　１名である Ｄ　０名である 難関大及び金沢大の現役合格者数が Ａ　70名以上である Ｂ　50名以上である Ｃ　30名以上である Ｄ　30名未満である	超難関・国立医学部の合格者数 【現時点での仮判定：Ｃ】 難関大および金沢大学の合格者数 【現時点での仮判定：Ｂ】	＊東大・京大の合格ラインを７月記述で文系SS７６、理系７４ラインとして判定する。文系は１名、理系０名、合計１名がその基準を満たす結果。（一昨年３名、昨年２名） ＊旧帝大等の合格ラインを７月記述で文系SS７０、理系６６ラインとして判定する。文系は７名、理系３名、合計１０名がその基準を満たす結果。（一昨年１５名、昨年７名） ＊金大ライン以上を７月記述で文系SS６０、理系５８ラインとして判定する。文系は２６名、理系２８名、合計５４名がその基準を満たす結果。（一昨年７２名、昨年５２名）
③ＣＵ（土曜補習）、補習を通して、より意欲的な学習の在り方へと切り替えさせる取組を行う。	「ＣＵや補習は自分の学力向上に役立っている」と思う生徒の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　70%以上である Ｃ　60%以上である Ｄ　60%未満である	生徒アンケート（７月） 「学力向上に役立っている」70% （当てはまる19%＋やや当てはまる51%） 【判定：Ｂ】	肯定的な評価は昨年同期に比べ３%増加した。一部、習熟度別編成も行い、補習で扱う内容や教材が十分に吟味されている結果が、生徒の学力向上意識につながっているものと思われる。 １・２年生は基礎・基本の演習のみならず、模試結果でみられた弱点の補強、さらには１ランク上の演習を行い、基礎力・応用力の充実を目指したい。３年生のＣＵは９月で終了するが、その後は後期（平日）補習にて、生徒の応用力をさらに伸ばしていきたい。
④中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任、教科担任等による積極的な面談を行う。	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢により良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が Ａ　80%以上である Ｂ　70%以上である Ｃ　60%以上である Ｄ　60%未満である	生徒アンケート（７月） 「より良い変化が生まれた」67% （当てはまる19%＋やや当てはまる48%） 【判定：Ｃ】	肯定的な評価は昨年同期に比べ５%増加した。特に２年生は１年時に比べ18%の増であった。個人面談における生徒理解や適切なアドバイスが効果的に行われた結果である。「学校は、学習に関する質問や悩みに対応してくれている」(74%)、「学校は、学校生活に関する悩みに対応してくれている」(61%)となっていることも踏まえ、生徒理解により一層力を注ぎたい。また、後期は１・２年の類型登録や科目選択、３年の進路選択を控え、面談の重要性がより一層増すため、担任のみならず学年組織として対応していく。
⑤中高一貫教育校として６年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	「中高一貫教育校として、６年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に教科で取り組んでいる」と思う教員の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	職員アンケート（７月） 「取り組んでいる」49% （当てはまる8%＋やや当てはまる41%） 教科アンケート 【判定：Ｄ】	肯定的な評価は昨年同期に比べ11%減少した。中高合同の教科会等を開き、指導方法等について年度当初以外にも複数回、協議・情報交換を行ったのは、４つの教科であった。全体的にみると、教科により差があることは否めない。中高連携の必要性をまず理解し、中高一貫教育の在り方を全体で共有したい。

【重点目標2】 教科指導の質的向上に努めるとともに、あらゆる教育活動を通して生徒の論理的思考力や表現力の伸長を図る。

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の扱い
①ＩＣＴの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業改善に取り組み、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。また、各教科の特質を踏まえた言語活動を通して、「コミュニケーション力」の育成を図る。	「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が、錦丘中との交流を含め、年間４回以上あった」と思う教員の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	職員アンケート（７月） 「１学期の間に３回以上あった」33% 「１学期の間に２回以上あった」32% 【現時点での仮判定：Ｂ】	肯定的評価は昨年度同期に比べ11%減少した。詳細にみると「３回以上」は全年比－３%、「２回以上」が－８%であった。新学習指導要領や高大接続システム改革も見据えて授業改善が求められていることを教員間で共有し、錦丘中の研究授業や後期互見授業を、自らの授業を振り返る絶好の機会として捉えられるように、教務課として旗振り役を務めたい。
	「授業でＩＣＴをよく活用している」「時々活用している」教員の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	職員アンケート（７月） 「活用している」62% （よく活用している40%＋時々活用している22%） 【判定：Ｂ】	昨年度は「よく活用している」36%、「時々活用している」19%で合計が55%であった。「よく活用している」の数値が増加しているものの、ＩＣＴの環境整備の進み具合を考えれば、もっと数値が伸びてもおかしくない。加えて、単にプロジェクタを使うことではなく、タブレット端末を活用するなど、より高いレベルのＩＣＴ活用について実践を進めたい。
	「ＩＣＴを活用した授業により、学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が Ａ　60%以上である Ｂ　50%以上である Ｃ　40%以上である Ｄ　40%未満である	生徒による授業評価（７月） 「高まっている」52% （当てはまる24%＋やや当てはまる28%） 【判定：Ｂ】	肯定的評価は昨年度同期に比べ４%増加した。一昨年度30%、昨年度48%、今年度52%と順調に数字は増加している。「わかりやすさ」「論理的思考力や表現力」「興味・関心や学ぶ面白さ」を高めるためにも、従来からの手法に加えてＩＣＴを効果的に活用することを進めたい。
	「授業の中に論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が Ａ　85%以上である Ｂ　80%以上である Ｃ　70%以上である Ｄ　70%未満である	生徒による授業評価（７月） 「伸ばす場面がある」77% （当てはまる27%＋やや当てはまる50%） 【判定：Ｃ】	肯定的評価は昨年度同期に比べ１%増加した。昨年度は「当てはまる」が25%、「やや当てはまる」が51%であった。学力スタンダードの作成や探究スキル育成プロジェクトを核にして、教え込み型の授業だけではなく、アクティブラーニング型授業にも学校全体で取り組み、論理的思考力や表現力を伸ばしたい。
	「授業の中に話し合いや発表などを通してコミュニケーション力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	生徒による授業評価（７月） 「伸ばす場面がある」69% （当てはまる30%＋やや当てはまる39%） 【判定：Ｂ】	肯定的評価を教科別にみると、国語（81%）、地歴公民（67%）、数学（57%）、理科（44%）、外国語（88%）、保健体育（67%）、家庭（87%）、情報（38%）で、数値のばらつきがみられる。コミュニケーション力の育成は、キャリア教育の視点からも育みたい能力であり、本校のスクールポリシーの柱の一つでもある。言語活動を重視したアクティブラーニング型授業に学校全体で取り組むことで改善に繋げたい。
②教科や総合学習の授業内容を関連させ、表現トレーニング、プレゼンテーション、多文化共生理解などに取り組むことで、論理的・批判的に事象をとらえ、自らの考えを述べる力を育成する。	「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が Ａ　70%以上である Ｂ　60%以上である Ｃ　50%以上である Ｄ　50%未満である	生徒アンケート（７月） 「関心を持つようになった」56% （当てはまる9%＋やや当てはまる47%） 【判定：Ｃ】	昨年度は「当てはまる」が6%、「やや当てはまる」が44%で、昨年同期に比べ６%増加した。授業から動機づけられるだけではなく、「ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業」「社会とかかわる土曜学習」等の教科を越えた横断的な取り組みが、社会的関心に繋がっていると考えられる。
③高校の各年齢段階で求められる知識・教養・感性を身に付け、文章の理解力・表現力を育成するために、読書を奨励する。特に、各教科と連携し、読書指導を授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて行うことによって推進する。	「授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて、生徒に適した書物を紹介し、読書量を増やすための指導をしている」教員の割合が Ａ　50%以上である Ｂ　40%以上である Ｃ　30%以上である Ｄ　30%未満である	職員アンケート（７月） 「生徒の読書量を増やすための指導をしている」31% （当てはまる11%＋やや当てはまる20%） 推薦図書の紹介冊数　前期で平均2.2冊 【判定：Ｃ】	今年度は図書課として、生徒の読書のきっかけづくりとして「先生のお薦めの１冊」の取り組みを仕掛けてみた。各先生の読書指導の契機になることをねらったものである。前年同期と比較して、今のところ数値的な大変化は現れていないが、先生方にはそれぞれのお薦めの１冊の現物をまず生徒の前で手にとって紹介していただき、次の新たな１冊につなげていければよい。
	生徒１人あたりの貸出冊数が Ａ　年間８冊以上である Ｂ　年間６冊以上８冊未満である Ｃ　４冊以上６冊未満である Ｄ　４冊未満である	７月末までの、生徒１人あたりの貸出冊数（図書館バーコードカウンターによる） １年　2.7冊　２年　2.1冊　３年　3.4冊 全学年平均　2.7冊 【現時点での仮判定：Ｃ】	読書アンケート（５月）において、「読書のきっかけ」の項目で「友人に薦められて」という理由が、前年度8%と比較して今年度は15%と倍増している点が注目できる。また、「図書館の取り組み」という理由も前回同様33%の生徒が挙げている。今後も生徒同士の読書への興味を高め合うための「ビブリオバトル」の取り組みや、図書館中心に「特集コーナー」による各ジャンルの本の設置を試みる等、いろいろに全校生徒に向けて仕掛けていきたい。

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の扱い
④学力スタンダードの到達目標の到達度をはかる問題作成を視野に置きながら、論理的思考力を高めるために必要な試験問題の作成について教科全体で検討する。	年間を通して論理的思考力を問う問題の割合（点数換算）の平均値が A　15%以上である B　10%以上である C　5%以上である D　5%未満である	1学期中間試験、期末試験の状況 教科アンケート 【判定：B】	１学期中間試験、期末試験を確認したところ、どの教科も10点程度以上は思考力を問う問題が設定されている。また、いずれの教科も教科全員もしくは学年や科目間で問題の検討も行った。思考力を問う問題の割合（点数換算）のみならず、より良い問題を作問するために、継続的に教科内で検討したい。

【重点目標3】 学習、進路、生活、部活動等を有機的に結びつけ、より自立的内発的に取り組むことのできる、実践力のある生徒を育成する。

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の扱い
①中学校と連携しながら、三点固定（学習開始時刻、就寝時刻、起床時間の固定）を図り、生活リズムを自ら整える態度を身に付けさせる。	遅刻をする生徒は一日平均で、 A　４人未満である B　５人未満である C　６人未満である D　６人以上である 「下校時間を守っている」生徒の割合が、 A　90%以上である B　85%以上である C　80%以上である D　80%未満である	遅刻調査（４～７月） １日平均の遅刻者数4.1人　【判定：B】 学習・健康・生活に関するアンケート（7月） 下校時間を守っている生徒 全学年平均84.9%　【判定：C】	１日平均の遅刻者数は昨年同期の4.2人とほぼ同じ4.1人であった。１年生の１クラス増を考えればおおむね評価できる。寝坊などの遅刻は全体の25%であり、75%は体調不良や通院などによる遅刻である。体調不良者の遅刻について保健室・相談室・学年との連携を密に取ることにより、不登校傾向の生徒に対する早期の対応ができると考える。 下校時間を守っている生徒の割合は84.9%で、一昨年86%、昨年87%と比べると悪くなっている。特に２年生の下校時間を守る生徒が79.1%と低かった。担任・部活動顧問からの指導と合わせて、下校指導に力を入れる必要がある。
②家庭学習時間調査による生徒の自省や様々な視点からの学年集会及び講演等における示唆を通じて、学習意欲を高めるとともに、生活全般において自立的・内発的な行動をとることができるように働きかける。	目標時間を達成している生徒の割合が A　80%以上である B　70%以上である C　60%以上である D　60%未満である	学習・健康・生活に関するアンケート（７月） 目標達成率（平日） １年67.3%　２年17.6%　３年35.4%　全学年40.1% 目標達成率（休日） １年37.7%　２年21.8%　３年17.2%　全学年25.5% 【判定：D】	昨年度の目標達成率は平日は１年66.8%、２年23.8%、３年36.7%、全学年42.4%、休日は１年35.8%、２年26.1%、３年9.6%、全学年23.8%であった。２年生の平日が－8.5%となっており、目標を下回っている状況にある。週間課題の提示だけではなく、予習・復習とリンクした日々の授業設計や学習意欲を持たせる授業を工夫し、自律した家庭学習に繋げたい。また、個人面談や学年集会等を通して、進路意識を高める取り組みも継続していきたい。（平日の目標時間は1年120分、2年150分、3年240分、休日の目標時間は1・２年240分、３年総体総文後480分）
	「シラバスを定期的に活用した」教員の割合が A　60%以上である B　50%以上である C　40%以上である D　40%未満である	職員アンケート（７月） 「定期的に活用した」62% （単元ごとに活用7%＋定期試験ごとに活用55%） 【判定：A】	昨年度は「単元ごとに」24%「定期試験ごとに」45%であった。また、「定期試験ごとに」は昨年度比＋10%となっているので、「少なくとも定期試験ごとには活用しよう」との意識は形成されている。また、生徒アンケートでは「シラバスを活用し、計画的に学習を進めている」生徒の割合は14%（前年比＋３%）となっており、若干の改善がみられた。今後ともシラバスの活用を計画的な学習に結び付けるられるようにしていきたい。
③部活動に所属している生徒の積極的な挨拶を核にして、生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気を醸成し、気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	「学校生活において、挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A　80%以上である B　70%以上である C　60%以上である D　60%未満である	生徒アンケート（７月） 挨拶を積極的に行っている生徒　74% （校外からの来校者にも積極的に挨拶している29%＋友人や教職員には自分から挨拶している45%） 【判定：B】	生徒アンケートによると、挨拶を積極的に行っている生徒は74%という高い数値結果となった。昨年度同様、保護者や外部の方からは挨拶がしっかりとできていないと言われることがしばしばあるものの、朝の挨拶運動においては昨年度よりも積極的に挨拶ができているというような印象がある。今後も朝の挨拶運動や日々の授業での挨拶を通して継続的・日常的に「挨拶」への生徒の意識を高めていく必要がある。
④部活動において、限られた時間を有効に活用させることによって、自主性自立性の育成と部活動の活性化を図る。	部活動加入率が A　90%以上である B　85%以上である C　80%以上である D　80%未満である １，２年生で「部活動と学習の両立ができている」と思う生徒の割合が A　70%以上である B　60%以上である C　50%以上である D　50%未満である	部活動加入状況（５月） １年　男子　97%　女子 102% ２年　男子　95%　女子　94% ３年　男子　75%　女子　69% 学校全体　89.5%　【判定：B】 学習・健康・生活に関するアンケート（７月） 「部活動と学習の両立ができている」 １年　63%　２年　56% 全体　59.5%　【判定：C】	１年生、２年生の部活動加入率が高く、90%を大きく上回った数値となっている。部活動は人間形成において重要な役割を果たしており、学習との両立が高校生活をより充実させるものともなるので、今後もこの加入率が大きく下がることのないよう、担任や顧問による生徒へのケアを大切にしていきたい。また、退部する生徒のほとんどが部活動と学習の両立のできないことを理由として挙げている。特に成績の伸び悩んでいる生徒に対する配慮ある面談を各部の顧問に呼びかけたい。また、保護者のアンケートでは「部活動は、学習と両立できるよう適切に行われている」と感じている数値が78%と高くなっているのは心強い。

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の扱い
⑤生徒会主催の行事を生徒が中心となって企画運営し、今後、社会人として求められる自主的自立的な態度や実践的な行動力を育成する。	「各行事において、生徒の自主性を高める指導を行い、自主性は高まった」と思う職員の割合が A　80%以上である B　70%以上である C　60%以上である D　60%未満である 「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」と思う生徒の割合が A　80%以上である B　70%以上である C　60%以上である D　60%未満である	職員アンケート（７月） 「自主性を高める指導を行っており、自主性は高まっている」74% （当てはまる10%＋やや当てはまる64%） 【判定：B】 生徒アンケート（７月） 「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」74% （当てはまる27%＋やや当てはまる47%） 【判定：B】	昨年に引き続き、教職員、生徒とも７割以上が肯定的な評価をしている。この後の紫錦祭や球技大会等においても、手をかけ過ぎることのくれぐれもないように、生徒の「自主性」を重んじた教職員の適切なサポートを促していきたい。
⑥環境美化の活動を通じて、「いしかわ学校版環境ISO」の本校の取組について、全校生徒の理解を深める。	「ゴミ排出量&紙リサイクル量」の測定結果報告において、年間のゴミ排出量が昨年の量と比較して A　5%以上の削減 B　3～5%の削減 C　0～2%の削減 D　増加	生徒美化委員による測定値（4月～7月） 可燃ゴミと容器包装プラゴミの合計 27年度　1,337.6kg → 28年度　1,338.2kg 昨年比　100.0%（+0.05%）　【判定：D】	美化委員による学年別ゴミの分別回収・計測が定着し、部室整理の可燃ゴミ放出などによる突出した排出もなく、ゴミの量は安定している。ただ、学年別にみると３年生で、昨年を大きく上回っている。（27年度122.4kg → 28年度　147.0kg　昨年比　120.1%）　放課後の教室学習の生徒が昨年より多いのではないかと考えられるが、後期も引きつづき啓蒙活動に努め、ゴミ削減の気運を高めていきたい。
⑦担任、学年、部顧問、保健室、相談室が十分に情報を共有し、問題を抱えた生徒を早期に発見し、自発的解決に向けて協力する。	「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が A　80%以上である B　70%以上である C　60%以上である D　60%未満である	職員アンケート（７月） 「対応ができている」90% （よくできている16%＋ほぼできている74%） 【判定：A】	「対応ができている」という評価が９割になるが、昨年度の結果よりもやや悪くなっている。また「よくできている」という回答に限ると16%にとどまっている。生徒の状況の把握は割合できていると思うが、対応がやや遅かったり、不十分だったりするケースが、実際にはあると思う。学年・担任・顧問などと一層、連携を密にし、適切な対応をとり、問題解決に近づけるように努力したい。
⑧学年通信や進路だより等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに、ＰＴＡ活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。	「学年通信や進路だより・行事案内など学校からの情報を見ている」保護者の割合が A　80%以上である B　75%以上である C　70%以上である D　70%未満である	保護者アンケート（７月） 「学校からの情報を見ている」76% （当てはまる34%＋やや当てはまる42%） 【判定：B】	学年通信や進路だより発行の際、保護者にメールで通知してきた。判定はＢとなるが、肯定的評価は前年同期の73%から微増である。学年通信等の発行日の確認がうまくいかず、配信が徹底できなかった面がある。各学年・分掌に総務への連絡をお願いするとともに、特にＰＴＡ行事の連絡配信も行うようにし、この取組を継続してメール配信の効果をみていく。